

カラオケの採点機の評価を考える バリデーション&キャリブレーション

伊東和樹は時間が少しでも空くと一人カラオケで練習をした。PDCA の実践である。点数が低いと、外れている箇所が多いことになるので、練習曲のテープを何度も聞いてはカラオケで練習した。カラオケの番号をメモしているので、すぐに入れられる。一人カラオケだと、11~12回/1時間練習できる。一人カラオケの良さだ。少しずつ点数が上がるのが楽しみになった。練習すればするほど点数が上がるのである。

あるとき、外出で出かけた先で、早く終わったので外出先のカラオケ店に入って練習をした。もちろんまだ自分で外れていることが分からないから採点機は Check の要である。

そこそこ点数も上がって少し自信が付き出した頃でもあった。ところが歌ってみたら点数があまりにも低い。あれ?とと思ってキーを上げたり、下げたり、あるいは、意図的に高い声を出してみたが点数は低いままである。無理して高い声をだしているの、第三者が見たら気が狂っているのではと思ったかもしれないが、伊東は必至だった。いろいろやっても点数は低いままだった。ほのかに芽生えた自信の芽が踏みつけられたようだった。

これまでの練習は何だったんだ。やはり音痴はいくら頑張っても音痴から抜け出せないのか。暗い気持ちで帰途についた。仕事で上手くいったことなど吹き飛んでいた。

カラオケ教室は2時間×2回/月あるので、新しい課題曲の練習をしなければならない。そこでいつも行っているカラオケ店に行った。いつも DAM で飲み物はトマトジュースの氷なしにしていた。カラオケ店で1時間と記入したら、店員が「DAM でトマトジュース、氷無しでよろしいですか?」と尋ねられた。誰も知らないと思って通っていたが、しっかりと覚えられていた。恥ずかしい思いを和樹はしたが、店員は和樹がどこの会社に勤めているかなど知らないからと自分に言い聞かせて、恥ずかしい思いを払拭した。

新しい課題曲の合間に、前回外出先で点数の低かった歌を歌ってみた。な、なんといつもの点数が出ているのではないか。それもキーを変えずに。

和樹はその時に理解した。「外出時に行ったカラオケ店の採点機のキャリブレーションが出来ていなかった」だけだったことに気付いたのである。

和樹は医薬品の品質保証を担当していたので、医薬品製造の基準 GMP を知っていた。医薬品製造では試験で医薬品を保証する考えはしない。例えば、無菌操作で充填された製品の無菌試験をして「確かにこのバイアルは無菌だった」と分かっても破壊検査なので使えない。注射剤の無菌性の保証はバリデーションで保証するのである。豆を煮たとする。煮えたかどうかを確認するために、豆を一個食べてみる。煮えている。しかし、他の豆が煮えているかはわからない。火の強くあたっているところは煮えたが火の弱いところはまだ煮えていないかもしれない。そのため、何か所から豆を食べてみて確認するがそれで100%の豆が煮えているかの保証にはならぬ。バリデーションとは100%の豆が煮えていることを確認する方法で、医薬品の品質はこのバリデーションで全数保証を行っている。カラオケで言えば、採点機が人が聴いて上手いと思うのにどれだけ近づいているかである。採点機が出た時点の採

点機の点数は人が聴いて上手いとはまだかなりかけ離れていたが、外れると間違いなく点数は下がった。最新の採点機はテレビでも使っているようにかなりレベルが高くなった。

このバリデーションを行うときの測定機器が正しいかどうかを確認するのがキャリブレーションである。お肉を 100 g 購入しても、重さが 90 g だったら、お店は 10% 少なくして客を騙して設けているのである。重さは計量法でそういうインチキができないように規制されている。マラソンの 42.195km あるかどうかはバリデーション。その 42.195km を測定する測定器が正しいかどうかを検証するのがキャリブレーションになる。

外出時に入ったカラオケ店の採点機のキャリブレーションが出来ていなかったことでショックを受けた和樹であった。自分は歌が上手いと自他ともに認めるだけの自身があれば、すぐに、「あれ？ この採点機おかしい」と断言できたのであるが、悲しいかな和樹にはそこまでの自身がなかった。

和樹はことの体験であることに気付いた。仕事でもプライベートでもいろいろな人が、和樹の行動や発言にいろいろなことを言う。中にはひどいことを言う人もいる。それに傷つくことも多かった。しかし、ひょっとして、カラオケの採点機のように、キャリブレーションされていない人の言うことに左右されたり、動揺したり、落ち込んだりすることは意味のないことだということを、和樹はカラオケの採点機のキャリブレーション不備であった。言う人が人格的にキャリブレーションされている人の発言であれば、考慮しなければならないが、キャリブレーションされていない人の言葉に傷つく必要はないのだということに気付いたのである。後はその人がキャリブレーションされている人かどうかを見抜く力である。宗教法人のことが問題になっているが、この宗教法人のバリデーションとキャリブレーションは問題ないかを確認して信じるに値する宗教かどうかを確認しない、まさに人生を左右されてしまうのだと、和樹は思った。